

地小出版
方小版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
年間	1,500円(税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

「なんとなく、クリティック」 というリトルマガジン 「サブカル」が終わった現在に問う

文・森田真規

『なんとなく、クリスタル』という小説をご存知だろうか？

ゼロ年代以降では長野県知事や新党日本の党首など、政治家としての活動が知られている田中康夫氏が、1980年、一橋大学在学中に「小説家」として初めて執筆した小説だ。「1980年6月 東京」という見出しで始まるこの小説では、大学在学中ながらモデルとして活動している主人公・由利の自由気ままで、「なんとなく、気分のいい」生活が、最初から最後までひたすら描かれている。駆け出しのミュージシャンである彼氏との微妙な距離感の恋愛模様、ディスコでの夜遊び、六本木・青山などでのショッピングなどなど、バブル前夜（というには早いかもしれないが）の東京の風俗文化の記述に終始した（ちなみに、この小説のページの半分は田中氏の個人的見解を含んだブランドなどへの注釈に割かれている）、摩訶不思議な小説なのである。

「情報」として知っていた当時の東京や若者文化の雰囲気

40代半ば以上の読者には、映画化や柴田恭平による同名の楽曲、ブランド志向の女子大生を指した「クリスタル族」という流行語(?)などのブームを生み出した、一過性で終わったありがたいなベストセラーとして記憶されているのではないだろうか。30代以下の読者には、タイトルを聞いたことはあるが内容はまったく知らない、という方が多いと思う。1983年生まれの



B6変型 / 定価1000円+税

筆者にとっても、『なんとなく、クリスタル』で描かれている当時の東京や若者の生活の雰囲気は具体性を持って想像はできず、後追いで調べて行くうちに「情報」として知っていった、という感じである。

さて、ここで筆者が編集・発行人を務め、今年2月に創刊したリトルマガジン「なんとなく、クリティック」の話に移ろう。本誌のタイトルはもちろん、『なんとなく、クリスタル』をもじったものである。端的に言って、この摩訶不思議な小説が好きだったことが、「なんとなく、クリティック」というタイトルを付けた理由なのだが、一方で、本誌の構想について人と話したり、コンセプトを考えていくうちに、これ以上に適したタイトルはないのでは、と思うようになっていた。

タイトルの由来にも通じるところが

あるので、「なんとなく、クリティック」創刊号の内容について紹介したいと思う。巻頭特集では、ボアダムズや羅針盤、ROVOなど、数え切れないほどのバンドやユニットに参加し、日本のオルタナティブな音楽シーンの中心人物として30年近く第一線で活躍されている山本精一氏を取り上げた。その特集は、40ページ以上にわたる山本氏のロングインタビュー、山本氏とコーナーアスこと小山田圭吾氏との「未知なる音楽」をテーマにした対談などで構成。他の企画としては、浅野にお氏の連載中のマンガ『おやすみプンプン』クロスレビュー、映画監督の瀬田なつき氏と俳優の染谷将太氏による対談、大ベストセラー『完全自殺マニュアル』の著者である鶴見氏の12年ぶりとなる新刊についてのインタビュー、マンガ・映画・音楽(ライブ)についての日記が掲載されている。

「サブカル」を扱ったカルチャー雑誌を作ろうと思って編集

山本精一氏の特集を巻頭に組んでいることもあり、本誌は発売後によく「音楽雑誌」と言われることもあったのだが、筆者としては自分なりの「カルチャー誌」を作ろうと思って編集していた。ひと口に「カルチャー誌」と言っても人それぞれ「カルチャー誌」の定義は異なると思うが、筆者にとってのそれは「サブカル」を扱った雑誌のことである。

本誌の「はじめに」でも触れたが「サブカル」とは、音楽、映画、ファッションなどを横断したポップカルチャー全般——ある種の(マイナーな)流行——を消費するゲームだったと思う(「サブカル」と「サブカルチャー」についても微妙だが大きな差異があると考えているが、それについては本誌の「はじめに」で書いたので紙幅の都合上省略する)。また筆者はイメージと

して、70年代は「カウンターカルチャー」や「アングラ」の時代で、80年代から90年代後半までは「サブカル」の時代だった、と捉えている。

「サブカル」に変わる役割を担うのは「批評」であると思った

そこで『なんとなく、クリスタル』が登場するのだ。1980年に発表されたこの小説には、「サブカル」を象徴するかのごとく80年代の若者の消費

文化が描写されている、と筆者には思えてならない。「カルチャー誌」を標榜する本誌で、この小説をもじったタイトルを付けたのはそういった理由からだ。さらに、なぜ「クリスタル」を「クリティック」に変えたのかというと、「サブカル」という文化現象が終わった現在、それに変わる役割を担うのは「批評」であると思ったからである（このことについての詳細も、本誌の「はじめに」で書いたのでそちら

を読んでもらえればと思う。

「なんとなく、クリティック」というリトルマガジンは、「サブカル」が終わった時代に「カルチャー誌」の限界と可能性を探る実験場のようなものにできればと考えている。それが読者の方々にとっても、何かしらのおもしろさを感じてもらえる雑誌になっていれば嬉しく思う。

(もりた まさき／「なんとなく、クリティック」編集・発行人)

新刊ダイジェスト

※価格は総額（税込）表示です。

『日本に生きる北朝鮮人 リ・ハナの一步一步』 ●リ・ハナ著

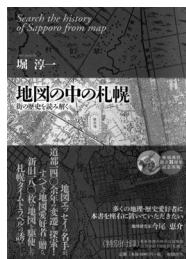


現在、日本に暮らす脱北者は約200人とされている。北朝鮮から18歳で脱出、中国で5年間を過ごし、2005年に日本へ来た著者は支援者に支えられ、アルバイトの傍ら日本語を勉強し、日本入りした脱北者で初めて大学生になった。本書は大学生活や友情、故郷や家族の思い出を語ったブログをまとめたもの。金政権下での生活も率直に語られ、謎多き北朝鮮を知る上でも興味深い。

一方では、京都旅行を満喫したり、ダイエットに悩んだり、若い女性の微笑ましい日常も描かれている。経験を伝え、脱北者のことを理解する一助になれば……と願う著者。苦難を乗り越え、小さな一歩でも前に進んでいく。タイトルにもそんな思いが込められている。

◆1365円・四六判・283頁・アジアプレス・インターナショナル出版部・大阪・2013/1刊・ISBN978-4-904399-08-8

『地図の中の札幌 一街の歴史を読み解く』 ●堀 淳一著



札幌の街は明治初期の北海道開拓に始まり、140年余りを経て現在に至ります。その歴史を残された地図から読み解こうというのがこの本。地図エッセイの第一人者、堀淳一氏の手にかかれば、街の発展とそれを支えた交通網の消長を中心に、古くは明治時代の地図から最近のタウンマップまでが、それぞれの札幌を語り出します。堀氏の札幌への思いが詰まったコラムが随所に挿入され、

土地条件図や札幌並木地図などの変わり種の地図も多数収録。特別付録として5万分の1地形図「札幌」の試験図（昭和57年要部修正）も付いています。全編にわたって歴史を読む楽しみ、それぞれの地図を眺める楽しみが満載です。

◆6300円・A5判・381頁・亜細亜社・北海道・2012/11刊・ISBN978-4-906740-02-4

『今こそ＜暗闇の思想＞を 一原発という絶望、松下竜一という希望』 ●小出裕章著



1972年、重篤な持病を抱えながら、国の周防灘総合開発計画の無謀さを衝き、拠点たる豊前火力発電所建設阻止に立ち上がり、環境権という新しい概念を打ち立てた松下竜一。発展も開発もほどほどにして、今ある電力で成り立つ社会や暮らしを考えようと＜暗闇の思想＞を発想する。松下が亡くなって8年。竜一忌での講演録である。東電福島第一原発事故の先に見えぬ状況と太陽エ

ネルギーの可能性を説く。著者は26年前、松下に呼ばれてチェルノブイリについて講演した。同じことが繰り返されたことに絶望する。しかし、今こそ松下の思想を生かす時であり、それが未来への希望であると、熱く語りかける。

◆1050円・四六判・117頁・一葉社・東京・2013/1刊・ISBN978-4-87196-052-6

『近江学 第5号』 ●成安造形大学附属近江学研究所編



滋賀県固有の文化的資源を多角的に研究する地域文化研究誌『近江学』の第5号。今号の特集は「木と暮らし」。物づくり、信仰、景観や環境といった様々な側面から近江の木の文化を掘り下げる。中でも多くのページを割いているのは、琵琶湖特有の木造船「丸小船」について。船造り技術の数少ない継承者である船大工の方へのインタビューをはじめ、その構造や原材、工具類に

いたるまで、丸小船にまつわる詳細がここで理解できる。「かつて一森は舟を生んだ。」という写真家の津田直氏のエッセイも。もうひとつの注目は、木地師発祥の地ともされる「小椋谷」への取材。漂泊の杣人などとも言われた木地師の伝説と歴史、現在を一望する。

◆1890円・A B判・95頁・サンライズ出版・滋賀・2013/1刊・ISBN978-4-88325-495-8

『ぐうたら旅日記 恐山・知床をゆく』 ●北大路公子著



行き先を決めるのも移動手段を決めるのも面倒なので“旅は嫌い”なはずが、友人に引っ張り出され、お泊まり会の延長のような旅に出かけることになってしまった。恐山、知床、ウニが目当ての積丹を大好きなビール片手にだらだらと歩く爆笑旅日記。札幌在住の著者があちらこちら仲間と共にツッコミながら巡る様子は爆笑を誘う。旅に際して自分でやったのは「荷作り」だけで、あと

は全て他の人がやってくれたと気づき愕然とするが、同じ場所に出かけても退屈しないのが特長と自負。そんなところに読者をも飽きさせない視点がある。不思議な味わいを持つ三題噺のショートストーリー編も収録。

◆1365円・四六判・191頁・寿郎社・北海道・2012/12刊・ISBN978-4-902269-57-4

地小出版
方小版

流通センター

ジャンル別
新刊案内

2013年2月1日～28日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は総額(税込)表示です。

【雑誌】

◆あおもり草子 No. 214 佐藤史隆編 A4 48頁 600円 企画集団ぷりずむ [青森] 978-4-503-19770-2 13/02

◆GREEN REPORT 398 廣瀬仁編 A4 192頁 2800円 地域環境ネット [埼玉] 978-4-905457-30-5 13/02

◆子どもと読書 398号 親子読書地域文庫全国連絡会編 A5 44頁 550円 親子読書地域文庫全国連絡会 [神奈川] 978-4-900910-98-0 13/02

◆かまくら春秋 No. 515 田村朗編 B6 92頁 290円 かまくら春秋社 [神奈川] 978-4-7740-0589-8 13/03

◆AXIS Vol. 162 石橋勝利編 A4 128頁 1800円 アクシス [東京] 978-4-503-19785-6 13/04

◆Be! 110号 No. 132 今成知美編 A5 107頁 840円 アスク・ヒューマン・ケア [東京] 978-4-901030-85-4 13/03

◆宗教民俗研究 第21・22合併号 日本宗教民俗学会編 A5 197頁 1890円 岩田書院 [東京] 978-4-503-19776-4 13/01

◆地方史研究 第361号 地方史研究協議会編 A5 136頁 1200円 岩田書院 [東京] 978-4-87294-961-2 13/02

◆明日を拓く No. 179 『明日を拓く』編集委員会編 A5 206頁 2100円 解放書店 [東京] 978-4-503-19772-6 12/11

◆Quip vol. 70 Quip magazine編 B5 130頁 630円 クイップマガジン [東京] 978-4-907716-70-7 13/02

◆多摩ら・び No. 78 けやき出版編 A4 70頁 500円 けやき出版 [東京] 978-4-87751-488-4 13/02

◆寺門興隆 No. 171 矢澤澄道編 A5 191頁 1155円 興山舎 [東京] 978-4-904139-74-5 13/02

◆子どもと本 第132号 子ども文庫の会編 A5 60頁 620円 子ども文庫の会 [東京] 978-4-906075-36-2 13/01

◆茶道の研究 No. 687 三徳庵編 A5 84頁 525円 三徳庵 [東京] 978-4-503-19769-6 13/02

売行良好書

期間：2013年2月16日～3月15日

[出荷センター扱い] ※税込み価格

- (1) 『幸せのかたち』 1890円・南方新社 (2) 『日本に生きる北朝鮮人 リ・ハナの一步一步』 1365円・アジアプレス出版部 (3) 『未来ちゃん』 2100円・ナナロク社
- (4) 『考える人・鶴見俊輔』 819円・弦書房 (5) 『幸せに暮らす集落』 1890円・南方新社 (6) 『最後の琵琶僧侶 永田法順』 2100円・鉦脈社 (7) 『小出裕章 原発と憲法9条』 1470円・遊経社 (8) 『居場所を探して』 1680円・長崎新聞社 (9) 『料理教室ベターホームが考えた カロリーダウンおかず』 1260円・ベターホーム出版局 (10) 『百歳がうたう 百歳をうたう』 500円・鉦脈社 (11) 『伊藤野枝と代準介』 2205円・弦書房 (12) 『土の話』 1365円・石風社 (13) 『なせば成る! 改訂版』 840円・山形大学出版会



[三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書] ※税込み価格

- (1) 『東京かわら版 3月号』 420円・東京かわら版 (2) 『なんとなく、クリティック1』 1050円・なんとなく、クリティック (3) 『謎の独立国家ソマリランド』 2310円・本の雑誌社 (4) 『雲のうえ 一号から五号』 1365円・西日本新聞社 (5) 『戦国史』 1680円・上毛新聞社 (6) 『考える人・鶴見俊輔』 819円・弦書房 (7) 『幸せに暮らす集落』 1890円・南方新社 (8) 『居場所を探して』 1680円・長崎新聞社 (9) 『定本 古本泣き笑い日記』 2835円・みずのわ出版 (10) 『未来ちゃん』 2100円・ナナロク社

[ジュンク堂書店池袋店地方出版社の本—センター扱い図書] ※税込価格

- (1) 『幸せのかたち』 1890円・南方新社 (2) 『精霊神の原郷へ』 2940円・鉦脈社 (3) 『あほな奴ほど成功する』 1050円・星湖舎 (4) 『精神保健福祉士の実践と養成教育』 1365円・冬弓舎 (5) 『考える人・鶴見俊輔』 819円・弦書房 (6) 『夢の実現するところ』 1890円・ギャルリー宮脇 (7) 『消えた琉球競馬』 1890円・ボーダーインク (8) 『奥多摩東部登山詳細図 全58コース』 800円・吉備人出版 (9) 『高尾山・景信山・陣馬山登山詳細図』 735円・吉備人出版 (10) 『原田正純追悼集 この道を一水俣から』 2940円・熊本日日新聞社 (11) 『居場所を探して』 1680円・長崎新聞社

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
本と出版流通のページ：<http://neil.chips.jp/>

トピックス — ★★


▼「世界に誇れる、日本をつくろう」をコンセプトに展開されてきた「職人という生き方」展、そのvol.7「甲州印傳」が3/1～5/31まで新橋のパークホテル東京25F 掌tanagokoroにて開催。4/23(火)には職人を招いてのトークショーイベントも。運営会社ブレインカフェからはすでに『江戸切子』『江戸小紋』『輪島塗』『駿河竹千筋細工』の4点が発行中です。

▼海外ニュースを見ていたら、アメリカで「小さな図書館」が急増しているということです。この4年で5千ヶ所にもものぼるとか。自宅の前に郵便ポストのような書棚のケースを建て、そこに自分の本を並べておくというもので、子どもから一般社会人まで、利用は無料で、一冊返したらもう一冊自分のお奨めの本を寄贈するのがルールだとか。アメリカでは「Little Free Library」と呼ばれ、「文学の井戸端会議」などとも例えられているそうです。小さな時に母親に読みかきせをしてもらった体験のある男性がお母さんの死後、懐かしみ始めた試みが全国に拡がっているそうです。日本では「家庭文庫」や「母親文庫」の歴史がありますが、公共図書館の発達したアメリカで何故、いま、このような文庫活動のようなものが始まるのか？ 地域のコミュニケーション作りとか、お年寄りの新たな生きがい作りとか等々と言われています。

郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
 - ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございました場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
 - ◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター
FAX：03-3235-6182

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM～8:00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

営業の
ごあんない

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

